

遺芳を萬代に傳へむ―發刊にあたりて

宮司 梅野 守雄

この世の中で、我身を捨てて國家のために盡すといふことほど崇高な精神はありません。日毎二萬八千六百七十九柱の御英靈にお仕へ申し上げてゐて、自分自身が忸怩たる思ひに驅られるのは、「遺書」を通してその御精神の尊さを強く感じた時であります。

この大切な遺書・遺品を保管展示する「遺芳館」を建設しておかねばならないといふ思ひを持つに到つたのは、昭和五十年六月に、白木の箱から出てきた高田豊志命の『うたにつき』を拜見した、この『うたにつき』に込められた精神は、當時の日本國を代表する一國民としての最高の御精神であると深く感動したのであります。その後次々と現はれてくる遺書を拜讀する毎に『遺芳録』發刊も大切な使命である、即ち、形を代へた「祭祀」ではないのかと感じ始め、創建九十周年記念の代表的事業とさせていただいた次第であります。

又、僅か十五歳の少年が、海軍に志願するけれど體軀が規定に達せず、その爲二度も不合格とされたことへの無念さ、それにも増して「國のために盡す」といふ信念の強さとの心の葛藤が、「血書」を書かせ、それを氏神さまへ数十度奉納せしめ合格を祈願され、美事合格、海軍上等水兵として、昭和十九年七月八日、マリアナ諸島にて戦死された、西藤武信命のみこころは、今の規準では理解することの出来ないこととなつてしまつてゐることに私は大きな不安と不満とを覺えるのであります。

もう一つ遺書を拜讀する時感じることは、文字が立派で嫌みや衒ひが少しもないと云ふことであります。その美しさは書道家と稱される方とは比べやうがない清々しさであります。それは言ふまでもなく我身を捨てて國家の爲に盡すといふ精神から生れ出るからなのでせう。更に感じることは、文章の正確さであります。かな遣ひはもとよりのこと、自分の意志をしっかりと傳へてをられ、その裏にご両親の養育の深さを感じ、更に御英靈の親を思ふ子としての又、人の親或いは夫としての最後の心の暖かさが拜讀する者にもしみじみ感じとることができるのであります。

この『遺芳録』を通じ、御英靈の崇高なるご精神を學びとつていただきたく存じます。そして、戦後五十有餘年の日本精神解體の歴史を深く反省し、今こそ我國としての主體性を取りもどすことが跡を継いでゐる者の最も大切な仕事ではないかと考へるのであります。この『遺芳録』に収めた遺書や日記類は、ほんの一部ではありますが、御英靈のみこころを傳へるに餘りある貴重なものと確信してをり、全ての御英靈のみこころとして受けとめていただければ幸ひに存じます。

平成十三年四月二十九日